［巻頭特集］

アトリエキーメン
代表 村井賢治さん

心を照らす温かな灯り

近江八幡市新町のカフェ、アトリエキーメン船着場。
古めかしいアンティーク調の照明が、
テーブルを囲む穏やかなひと時を灯す。
やわらかな光のつくり手は、村井賢治さん。
銅と鉄を使い、暮らしに合わせたシェードを生み出す。

「ないものはつくればいい」理想のシェードをもとめて

東近江市宮井町の田園風景を背に、アトリエキーメンの工房が建つ。30坪ほどの作業場では、ガスバーナーや木槌をはじめ、金属加工に使う工具が作業台を埋め尽くしていた。「ペンダント型や壁付け型のシェードは、主に銅板を切り出して使います。加工はすべて手作業。叩き出して形をつくった後、色や部品をつけていきます」と制作手順を話すのは、アトリエキーメン代表の村井賢治さん。慣れた手つきでバーナーに火をつけ、銅製の部品に炎を当てる。表面の不純物が燃え、緑色の炎がゆらめいた。

1978年、宮井町で生まれた村井さん。高校を卒業すると、電気水道工事を営む父の会社で働き始める。「若い頃から自分で家を建てたくて、デザインを始めたんです」。休日には、後に妻となる奈穂さんと国内外へ出かけ、家具や雑貨を買い求めて旅をした。

電気や水道工事の技術、設計、積算を学び、マイホームの建築に着手したのは4年後のこと。おおよその家具を集め、設計と内装を自ら手がける中、どうしても理想の照明機器だけは見つからなかった。周囲からも、「思うような照明が見つからない」という声をよく聞いた。「ないものは、自分でつくればいい。どうせつくるなら販売できる品質をめざそうと考え、研究を始めました」と振り返る。

当時は景気が低迷し、電気水道工事の仕事は減りつつあった。公共や一般の工事だけでは先が見えない。「照明のデザイン提案から制作・設置までできる、センスのいい電気屋ならやっていけるだろうと考えたんです」。2006年、村井さんは独立し、アトリエキーメンを立ち上げる。従業員は1人、顧客はなし。まさにゼロからのスタートだった。

家具を集めて旅し、設計・施工を自ら手がけた自宅

銅板を叩き出し、照明の一つひとつを手作業で形づくる

出会いをチャンスに変え キャリアを重ねていく

村井さんは仕事を得るため、自作のシェードを風呂敷で包み、手当たり次第に大阪府内の店をまわった。一軒一軒で作品を見せたが、照明デザイナーとしてのキャリアを聞かれ、門前払いを受ける。「独立の3日後でしたから、キャリアなんかありません。名前を売るには展示会を開くしかないと考え、箔がつきそうな神戸を選びました」

アトリエキーメン
代表
村井賢治さん

手頃な会場を見つけて作品を並べると、クチコミが広がり、取材が殺到する。次第に依頼が増え、仕事が落ち着いたころに施工事例を携えて、再び営業活動に出た。

そんな中、取引先のアパレルショップで見かけたカバンが、村井さんの運命を変える。カバンは高くて買えなかったが、デザインを担当したアパレル業界の有名デザイナー・Kさんと知り合った。「銅で指輪をつくれますか」と聞かれて試作を納めたところ、300個を受注。指輪は海外へ向けた展示会で並び、大きな反響を得た。

さらに、Kさんの東京出店で店舗工事の依頼を受ける。工事を終えた後、オープンまでの期間を好きに使っていいという。場所は渋谷の一等地。ありったけのシェードを持ち込んで展示すると、SNSで情報が拡散。展示会は大盛況に終わった。

2007年、自信とキャリアを得た村井さんが選んだ次のステージは、近江八幡市永原町通りの空き町屋。所有者の許可を得て、解体寸前だった築150年の商家を改装し、地元のアーティストを集めて尾賀商店をオープン。独立から1年を経て、初めて構えた店舗だった。

どんな小さな依頼にも真摯に向き合う

顧客の住環境に合わせたシェードを制作するうち、村井さんの心にふと疑問が浮かんだ。「僕がつくる照明って、いったいなんだろうと考えたんです。でも、自己表現のための照明なんて考えたこともなくて。僕はやっぱり、道具としての照明がつくりたいと気づきました」

思い立つと、友人に手紙を書くためのシェードをつくってみた。ところが、筆不精でなかなか書けない。手元に集中していると、万年筆や便箋セットが気になりだし、結局、文机からイスまで、すべてを鉄と銅で制作した。展覧会の来場者から北鎌倉の丘に建つ空き家を紹介され、手紙を書くのに使う家具や照明の個展を開催する。『『僕が手紙を書きに行くから、皆さんも来ませんか』というコンセプトでした。初日はゼロでしたが、新聞で紹介されると、驚くほど人が来てしまいました」と村井さんはほほ笑む。反響を得て、個展は東京都や京都府、大阪府でも開催した。

2011年、近江八幡市新町にアトリエキーメン船着場を新たにオープン。オーダーメードのシェードに加え、ドアノブやポスト、果ては鉄製の階段まで、幅広い要望に応えてきた。今では工房のスタッフも6人に増え、若い職人が育ちつつある。「実は、自分の業種が何なのかまだ決めていなくて、50歳までは決めないでおこうと考えています。50歳になったとき、できることが増えているはずですから、その時に決めようと思っています」と、目を輝かせて語る村井さん。差し出した名刺には、アトリエ名と名前のみがシンプルに記されていた。

アトリエキーメン船着場 http://key-men.net
近江八幡市新町1-16　0748-33-0440　13:00～18:00　火・水定休

上）改装を手がけ、クラフターを集めて立ち上げた尾賀商店　中右）銅のポストを希硫酸液に浸けて下地を整える　中左）銅をバーナーで炙った焼き色。虹のような色合いが人気を博す　右）アンティーク風の古銅色や白エイジング塗装など、住環境に合わせてカラーを提案する

文／延原正人　写真／フォトスタジオスピカ 北村拓也　写真提供／村井賢治　デザイン／chica